



国際シンポジウムDIALOGUE ON DEATH AND LIFE : VIEWS FROM EGYPT p.4

■巻頭エッセイ

月本 雅幸 西垣 通

■イベント報告

国際シンポジウム

**DIALOGUE ON DEATH AND LIFE:
VIEWS FROM EGYPT**

(『死生をめぐる対話—エジプトからの眺望』)

学術俯瞰講義特別講義

「不動の身体を生きる」

シンポジウム

「死生学と生存学」

講演会

「Gordon Planes (Chief) &
Shirley Alphonse (Healer) 死生を語る」

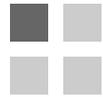


シンポジウム「死生学と生存学」 p.10



講演会「Gordon Planes (Chief) &
Shirley Alphonse (Healer) 死生を語る」 p.8

他



月本 雅幸（人文社会系研究科教授 国語学）

日頃、現代の平均的な日本人は、死に臨むとか、危機的な状況に置かれるというような特別の状況にない限りは、自分の死生観を他人に語ることはほとんどないと言ってよいだろう。私もそのような一人であるけれど、この機会に思い切って、本当に思い切って私個人の死生観の一端を述べてみようと思う。

福岡県の玄界灘に面した町に1954年に生まれた私は、4歳の時に自宅から数kmのところにある幼稚園に通い出した。それは創立間もなく、カトリック教会が運営していたので（今も鹿児島本線の車窓からその礼拝堂を望むことができる）、私は「主の祈り」を暗唱させられたが、その場所が礼拝堂であったので、子供心にはその天井の高さから、深い穴の縁に立った時と同じような恐怖が感じられて、そのためであろう、なかなか暗唱ができずに何度も居残りをさせられたことをよく覚えている。

幼稚園に通い始めて2ヶ月ほど経った頃、私は麻疹を発症した。しかし、医師は単なる風邪と診断し、治療するうちに、肺炎を併発してしまっつた。高熱で、かつ苦しい息の中で、私は夢とも現とも分からぬ次のような映像を見たのである。――医師が大きな黒い鞆を持って往診に訪れ、私を診察して、注射を打ち、厳かに「今夜が山でしょう」と述べて辞すると、今度は母が枕元ですすり泣いて「私が代わってやれたら」と言う。暫く暗黒の中にいた私にはやがて、視界の先に朱塗りの太鼓橋が見え、その向こう側で見知らぬ老婆が手招きをしている。しかし、人見知りの強い私は決してそちらに近づこうとはしない。――どのくらい時間が経ったか、気が付くと私は快方に向かっていたのである。

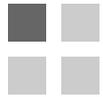
このストーリーは余りにできすぎていて、あるいは後日周囲の大人達から聞かされたことや、子供ながらに本を読んで得た知識から遡って再構成されたものかもしれない。またこの話は私と両親の間ではその後一種タブーになっていて、ほとんど話題にしたことがなかったが、数年前、思い切って今年84歳になる母に少しだけ持ち出して見たところ、「さあ、そんなこともあったかねえ」と言うのであった。

しかし、この体験は私にとって決定的な意味を持つこととなった。つまり、私は4歳にして、以

後の人生が「余生」となったのだ。さらに、ここからは紙幅の関係で簡略にしておくことにするが、6歳の時に私は少年雑誌で難病の少年の話題を読んで、自分もそれに同化し、当時病弱で月に3日は学校を休んでいたこともあって、自分が17歳までしか生きられないという想念に支配されるようになった。実際には私は生き続け、特に何事も起きなかったが、観念としてはここで、私は「余生の余生」を送ることになったのだ。ついでに言うと、さらに私はその後どういうわけか、今度は自分が27歳までしか生きられないという観念に取り憑かれた。しかし、またも何も起きなかったので、こうして観念の上では私は今、「余生の余生の余生」を生きている。

そんなばかばかしい話があるか、と読者は呆れられるかもしれない。でも、1970年代の経済優先の時代風潮の中にあって、私はそれには背を向けて言語の学問を選んだ。そして日本語学（国語学）の中でも、訓点研究という、研究者人口が日本で、そして世界で10人程度の専門を選び、ある意味では好き勝手な人生を送っていると自覚する。同業者の中には60歳を過ぎたら創造的な研究はできない、と焦っている人がいたりもするが、そんな中であって、私は今、何歳になっても自分なりの研究が続けられるような気がして、何十年も先の研究計画を立てている。こう考えればこの「余生意識」もそんなに悪いものでもないと思える。

ただ、今一つ心配なことがある。今年87歳になった父に、半世紀前に私の身の上起きた大事件について、ちょっと確かめて見ようと思うのだが、もしかしてこんなことを言われやしないかと不安になるのだ。「さあ、そんなこともあったかねえ」と。



西垣 通 (大学院情報学環教授 情報学・メディア論)

いったいコンピュータに“死”というものはあるのだろうか？——この問いは一見、馬鹿馬鹿しく思われる。たしかに死とは何かは難題中の難題で、死生学研究においてもさんざん議論されてきたことだろう。だが少なくとも生命科学的には、死とは、個体をつくる生物つまり主に有性生殖をおこなう多細胞生物にあてはまる概念である。生物でもないコンピュータが死んだりするはずはない。

とはいえ、それならなぜ、「機械の心」といったテーマが言あげされるのか。人工知能研究者は「言葉を話すロボット」の制作に躍起となり、哲学者は生命体と電子機械とを分かつ境界線の危うさについて深遠そうな議論をくりひろげ、作家は脳神経と電子回路が混交したサイボーグの夢を飽きもせずくりかえす。いやそれどころか、分子生物学や脳科学といった生命科学分野の研究者のなかにも、ひそかにコンピュータ論理に類した情報処理メカニズムを体現したモデルを信じこんでいる人々が少なくないはずだ。

これらの思考はすべて、生命体と機械との異質性に疑問をつきつける。それが現代科学の主流の知なのである。とすれば、やはりコンピュータも「死ななくては」ならない。なぜなら、およそ人間であるかぎり、心のなかから死の陰翳と不安を取り除くことは不可能だからだ。われわれは誰しも、命の短さ長さに一喜一憂しつつ暮らしている。たとえ天才エンジニアが「機械の心」らしきコンピュータ・システムを制作したところで、そこに死の陰翳や不安がなければ、それは三流の二セモノでしかない。

だからたぶん、冒頭の問いかけにたいして、「機械の心」信奉者は次のように答えるのではないか。——「もちろん、コンピュータも寿命がくれば死ぬさ。部品が古くなればいつか壊れるだろ。人間とまったく同じじゃないか」と。

さて、この答は正解だろうか。私見では正しいとは言えない。コンピュータという機械は、予め書かれた操作を永遠にくりかえす存在である。プログラムとは「予め書く」という意味であって、これにしたがって動作しているコンピュータのなかでは、いわば時間は完全に静止しているのだ。さまざまな入力信号にたいして出力信号をかえすコンピュータは、あたかも流れざる時間のなかで

「動的に反応している」ように見えるかもしれないが、それは誤解である。実は、プログラム制作者が前もって定めた静的な論理操作を愚直に行っているにすぎない。

もちろん、部品は古くなり、やがて異常動作がおき、コンピュータは壊れる。だが、壊れた時点でそれはもはやコンピュータではなく、単なる廃物と化してしまう。要するにコンピュータとはあくまで、プログラム制作者が定めた論理構造を体現した他律的・共時的存在ととらえられるのであり、それ以上でも以下でもないのだ。

一方、生物は流れゆく時間のなかで、一瞬たりとも休むことなく、過去の自分にもとづいて自分の構造を再帰的に作りかえていく自律的・通時的存在である。たしかに生物は外界からの刺激にたいして一定の反応を返すように見えるが、実は入力信号にたいして予め定められた出力信号を返しているわけではない。再帰的・自己言及的に存続しているので、まるで何らかの機械的ルールがあるような印象をあたえるだけなのである。生物は流れざる時間のなかで生きていく。個体は死ぬが、誕生も死も、生殖という遺伝子混交によって環境変化に何とか適応し、存続していくための戦略にすぎないとも言えるだろう。

要するに、コンピュータに“死”は無いのである。にもかかわらず、現代科学はいったいなぜ、死なないコンピュータをモデルにして死にゆく人間をとらえようとするのだろうか。ここに時代のきわめて根源的な歪み、いや狂気を見ぬくまなざしが、いま求められているのではないだろうか。

VIEWS FROM EGYPT (『死生をめぐる対話---エジプトからの眺望』)

大稔 哲也 (東京大学大学院人文社会系研究科准教授 東洋史学)

去る2009年9月29日から10月4日にかけて、エジプト・アラブ共和国のカイロ、及びアレクサンドリアにおいて、標記の国際シンポジウムを主催した。エジプト文化省(高等文化評議会)、アレクサンドリア図書館Bibliotheca Alexandrina、NIHUプログラム「イスラーム地域研究」、日本学術振興会カイロ研究連絡センター、カイロ大学文学部社会調査センターとの共催であり、エジプト文化省とアレクサンドリア図書館の全面的支援を得ることができた。

この会議は日本とエジプトとの間で、少なくとも(日本研究以外の)文系の事例として、双方が完全に平等にコミットして国際研究会議を実行するおそらく史上初めての試みであったろう。ここで「平等に」というのは、経済的負担を含めてのことである。この意味では、日本とエジプトとの文化交流・共同研究の在り方の転換点をなすものと評価されるべきなのかも知れない。GCOE死生学にとっても、中東イスラーム諸国で行う最初の共同研究であった。その場所として、人材と研究蓄積が豊富で、世界への発信力を有するエジプトが選択されたのである。

さて、9月28日深夜にカイロ空港へ到着した我々は、翌29日午後にまず、ウォーミングアップを兼ねて、幾つかモスクなどを見学の後、考古学博物館で古代エジプトにおける死生について思いをめぐらせた。夕刻からはカイロでの開催場所、オペラ・ハウス内の高等文化評議会国際会議場へ移り、ファールーク・ホスニ文化大臣主催のレセプションとオープニング・セッションを行った。控室からすでに人が溢れていたが、会場内はさらに熱気に満ちており、現地の研究者たちに加えて、取材のマスコミ陣も多かった。まず、文化大臣に代わって、エマード・アブー・ガーズィー博士が挨拶、ホスニ大臣は直前のユネスコ事務局長選に敗れ、現地では日本が落選に決



定的役割を果たしたと報道されたため、険悪な雰囲気も危惧されたが、全くの杞憂であった。続いて本GCOEの島蘭進リーダー(東京大学教授/宗教学)と在エジプト日本大使館広報文化センター長の岸守一氏が挨拶した。さらにTV・ラジオ・新聞など報道陣の取材が続いたが、その全てに対応することは不可能であった。この日だけでも、参加者は随分と交流を深めることができたと思う。

翌30日は、冒頭に在エジプト日本大使館の石川薫大使よりご挨拶いただき、その後、島蘭リーダーが死生学研究の概要とその目指すものについて、全体の導入をなす報告を行った。次いで基調講演として、アフマド・ザード教授(カイロ大学前文学部長/社会学)と町田宗鳳教授(広島大学/宗教学)にお話しいただいた。各々、エジプトと日本の事例を中心に図版も多く使用した講演であり、シンポジウム全体を俯瞰して多くの問題提起をしていただいた。これに対するコメントを、ハサン・ハナフィー教授(カイロ大学/哲学)と筆者が述べた。

そして、第1セッションは、「現世と来世—哲学・神学・宗教」と題し、柳橋博之准教授(東京大学/イスラム法学)の司会のもと、鈴木泉准教授(東京大学/哲学)、ハーラ・ファード講師(カイロ大学/スーフィー哲学)、及び吉田京子特任研究員(GCOE/シーア派思想)が研究発表を行った。西洋哲学、スーフィー哲学、シーア派思想、とそれぞれ背景は異なるものの、エジプトでも哲学的対話が成立することが示された。

2時間強の昼食ブレイクの後、第2セッション「靈魂と死後の生」となった。エジプト側からアフマド・ムルスィー教授(カイロ大学/社会学・民俗学)とサミーフ・シャアラーン博士(芸術アカデミー民衆芸能高等研究所長/民俗学)、日本側から嶋内博愛



特任研究員（GCOE／ドイツ民俗学）が発表した。このセッションは今回の目玉の一つで、実際に現地で最も関心と評価が高かったものの一つである。エジプトの民俗学者・人類学者は死生学について豊富なデータを集積し、多大な関心を寄せてきたにもかかわらず、主としてアラビア語によってのみ活動してきたために、これまで日本や欧米との交流がほとんどなかった。今回は本格的な交流の嚆矢と言えよう。

最後に、アフマド・ザード教授と筆者が共同司会し、全体討論の場を設けたが、会場のエジプト側からの質問・コメントが止まず、時間の制約ゆえの終了とした。筆者はその後に、運営全般と協力者に謝辞を述べて閉会の挨拶に代えた。

そののち、エジプト側を慰労する懇親会を持ち、さらにヨットを借切って夜更けまでナイル川を上下に航行しつつ、埃日の懇親を深めた。ナイルの川面を渡る夜風に吹かれ、参加者と運営側が一つになれた幸せなひとときであった。

翌10月1日は終日を研修・見学に充てた。夕刻まで「死者の街踏査」「東方キリスト教文化探訪」「古代エジプト遺跡」の3グループに分かれて行動した後、フサイン・モスク前に集合して、書店街や書籍探し屋の蔵などを訪問した。特に死者の街では、現地の人ですらほとんど訪れることのないユースフ兄弟廟などを訪問したほか、墓堀りの住む墓館を訪ね、実際にムスリムの墓造りの現場を教えてもらった。また、別の墓地居住者のお宅で、聞き取りも行った。

10月2日は、早朝からアレクサンドリアへ移動。午後から、アレクサンドリア図書館側の御厚意で準備された特別見学コースへ向かった。まず、ユダヤ墓地の内部や地下埋葬室などを、エジプト人ユダヤ教徒のユースフ氏に解説同行いただいた。アレクサンドリアのユダヤ墓地訪問は、日本からは初めてのことであろう。次にコプト・キリスト教徒の墓地、第一次・第二次大戦期の欧米人墓地、ムスリム墓地・聖者廟などを見学した。イスラームが広まる以前から現在までエジプトに展開するコプトの墓地も、実は専門家でもなかなか入構できないものであり、極めて貴重な機会であった。

夕刻、我々はアレクサンドリアの会場であるアレクサンドリア図書館Delegates' Hallでの開会式に臨んだ。同図書館は、古代のアレクサンドリア図書館にちなんで再建されたものである。「シンポジウム」



の語源を古代アレクサンドリア図書館におけるシンポジウムに求める説があるが、それに従えば、われわれはシンポジウム初源の地でその慣行に倣ったことになろう。会場は恐らく150人程度の人々の熱気に包まれており、後に参加者の名簿を見て、遠くカイロや近郊の都市からも多くの市民が参加して下さったことを知った。

冒頭にハーレド・アザブ博士（同図書館広報センター長／イスラム考古学）が挨拶を行い、次いでヤフヤー・ザキー教授（同図書館学術文化部門長、アレクサンドリア大学前医学部長）が医師としての現場を踏まえた貴重な講演をして下さった。同じくアシュラフ・ファッラージュ教授（アレクサンドリア大学文学部長／言語学）も趣の深いスピーチをして下さった。日本側からはやはり島園リーダーによる挨拶の後、日本学術振興会カイロ研究連絡センター長の大石悠二先生からも貴重なご挨拶をいただいた。

10月3日は、基調講演として、ガリーラ・エル・カーディー博士（フランス開発科学研究所／都市工学）をパリから招き、カイロのいわゆる「死者の街」について、都市計画や開発の立場から、歴史的視点も絡めて講演していただいた。死者の街を描いた仏制作の映画も併映された。

この日の第1セッションは、「死生と造形文化」と銘打ち、ロワイ・マフムード博士（アレクサンドリア図書館書道センター長／考古学）、ハーレド・アザブ博士（前出）がアレクサンドリア側から、秋山聰准教授（東京大学／美術史）と富澤かな特任研究員（GCOE／インド宗教研究）が日本側から報告した。図版の豊富な報告が続き、図書館講演ホールの優れた上映設備が大変役立った。また、古代エジプト、イスラーム建築、西洋と日本の美術、インドのオペリスク建築など、扱う内容が多彩でかつ議論が収斂

して好評を博した。

講演ホール棟に併設された貴賓客用食堂で昼食をとったのち、午後の第2セッションへと臨んだ。これは「死者と身体性」と題されたもので、日本からは守川知子准教授（北海道大学／イラン史）と藤崎衛特任研究員（GCOE／西洋中世史）、アレクサンドリア側からはファールーク・ムスタファ教授（アレクサンドリア大学／社会人類学）とマーギド・アッラーヘブ博士（エジプト遺産保存協会／コプト建築家）が報告を行った。これまでその名前こそつとに知られてきたものの、日本との研究会議には初登場であるムスタファ教授や、コプト・キリスト教徒のアッラーヘブ博士と交流できたのは収穫であるし、日本側の報告内容も関心を集めた。

第3セッションは「法から見た死生」と題し、サイド・アッダッカーク教授（前アレクサンドリア大学副学長／法学）の司会のもと、日本・エジプトのイスラーム法学の専門家に、コプト・キリスト教の法的側面からの報告も加えるという野心的なものとなった。日本からは柳橋博之准教授（東京大学／イスラーム法学）、エジプト側からはムハンマド・カマールアッディーン教授（アレクサンドリア大学／イスラーム法）、マグディー・ギルギス講師（カフル・アッシェイフ大学／コプト史）というラインアップであった。

つづいて、マンスール・ウスマーン博士（ワーデュー・ゲディード考古局長／考古学）によって、西部オアシス地域バガワートにあるコプト遺構のライド・ショーが行われた。最後に町田宗鳳教授とロワイ・マフムード博士によるまとめの討論に、会場からやはり多くの質疑が続いた。ここもやむを得ず時間で区切り、筆者の挨拶で会議を締めくくった。

翌4日は早朝から図書館のVIPツアーを用意していただき、アレクサンドリアに名残を惜しむ間もなく、カイロ空港へ直行、主だった者はそこで帰日した。

今回のシンポジウムは、冒頭にも述べたように、エジプトと日本との学術交流の在り方に再考を促す、

画期的なものとなった。それゆえ、現地マスコミによる取材攻勢も凄まじく、島蘭リーダーがテレビ（ニュース番組を含む）4局、私が6局（「徹子の部屋」のような2時間対談番組を含む）、他のエジプト側参加者ものべ4局以上に出演し、ラジオにも各々2局までは対応したが、それ以上は時間の制約から断らざるを得なかった。新聞・雑誌もロンドンをベースとして世界的に読まれる『アッシュルク・アル・アウサト』や代表的な現地紙である『アフラーム』や『 Gum Freeeya』などを筆頭に、のべ30紙以上に報道されたと思う。ロイターやサウジアラビアの新聞、そしてモロッコの新聞までにも、紹介・報告が続いた。これは予想を上回るもので、今後は事前にマスコミ対応も十全に練っておく必要があると痛感している。これほど多くの新聞・雑誌等に記事が掲載されたため、今回のシンポジウム自体が、後代になって日本=エジプトの交流史を繙くうえでも、看過し得ない研究対象となるであろう。さらに、アレクサンドリア在住の幅広い研究者たちとの本格的な学術交流も初めての試みとして評価されよう。

この報道量を受け、本シンポジウムで発表したいというアラブ各国からの研究者や、死生学のプロジェクトに加わりたいという者、さらに日本で死生学を学びたいと希望する者も現れた。今後、これらへの対応も求められよう。

今回の反響を受け、島蘭リーダーは再来年に日本でこの続編を行うことを宣言された。その折には、今回の試掘で明らかになった共通の論点や、今回は論じられなかったが次に焦点とすべき領域を取り上げるなど、この結果を踏まえた対応が必要となろう。

末筆ながら、今回のシンポジウムに多忙をおして参加された発表者の皆様、エジプト側のスタッフ、裏方として事務局を支えた特任研究員の方々、そして何より、現地で参加下さった延べ300人にも上るであろう研究者・市民・マスコミの方々、これらすべての皆様に心より厚く御礼申し上げます。





島 進 (本COE拠点リーダー 人文社会系研究科教授 宗教学)

学術俯瞰講義は小宮山宏前総長の提唱によって教養学部の基礎教育として2005年の冬学期から始められたもので、これまで「物質の科学」、「社会の形成」、「生命の科学」、「数理の世界」、「エネルギーと地球環境」などが行われてきた。人文社会系が中心となって行ってきたものとしては、2006年冬学期に「学問と人間」を開講したが、続いて2009年度夏学期には「死すべきものとしての人間」を開講することとなり、島がコーディネータ、教養学部（総合文化研究科）の村松真理子准教授がナビゲータとして14回の講義を行った。詳細については、以下のウェブサイトをご覧ください。

<http://www.gfk.c.u-tokyo.ac.jp/ac2009SummerD.html>

この講義はグローバルCOE死生学拠点から、島、清水哲郎、熊野純彦、金森修の各教授に登壇していただいた他、人文社会系研究科から逸身喜一郎、沼野充義の両教授にも講義をお願いした。西洋の死生観について哲学や文学を通して学びながら、安楽死・脳死臓器移植問題など、現代のアクチュアルな問題との関連を考察し、また日本の死生観と比較する視点を養うことを目指すものだった。通常講義では毎回、500名を超える聴講者があった。

この学術俯瞰講義「死すべきものとしての人間」の一環として、2009年5月14日、特別講義「不動の身体を生きる」が駒場キャンパス18号館ホールで行われたが、これはグローバルCOE死生学拠点の共催によるものである。この講義は通常の講義時間とは別に時間をとって、清水教授と島が登壇し、ゲストとして日本ALS協会（JALSA）の橋本操会長と川口有美子さんに来ていただき、橋本さんや川口さんと話し合いながら、現代人にとっての死生についてともに考えようとするものだった。

ALSとは筋萎縮性側索硬化症の略称である。この病気は神経性難病の一つで、発病すると次第に全身の筋肉が麻痺していく。手足も口も思うように動かなくなると、自力では動けなくなり、また言葉を発することも困難



になる。しかし、そんな病状になっても視角、聴覚他、感覚器官は機能しており、工夫をすれば意思・感情・思考を表現し、介助を得れば、どこへでも出かけて交友を深めることができる人も少なくない。ALS患者を中心とする人々は、ネットや携帯電話を通して、たいへん生き生きとしたコミュニティを形成している。だが、一般社会はこうした難病者が生活しやすいようにすることの必要性を否定し、結果として望まぬ死を強いられる場合も少なくない。そうした患者・障害者にとって、「尊厳死」言説は脅威ともなる。

橋本さんご自身、自力で動くことも話すこともできない病状だが、豊かな表現力、行動力を十二分に発揮し、こうした現状を打開し、患者・障害者が生きやすい環境を創出すべく活動をしてきた。また、川口さんは健常者だが、かつてALS患者のご家族を介護した経験からこの運動に関わってきた方である。特別講義ではまず、川口さんからALS患者の生活についてパワーポイントによる紹介があり、続いて、清水教授や島が橋本さんと会話しながら、ALS患者の視点から見えてくる死生のあり方について話し合いを進めた。

「他者に役立つことをできずに生きていく」ということから、そもそも死なずに生きていくことの意義、そしてそれが共同の営みであることの意義が問い直される。わずかに残された顔の筋肉を用いて、橋本さんは核心をつく言葉を紡ぎ出す（ボランティアの学生が通訳）。その重い問いかけは死生学の根本に関わるものである。短い講義時間の中で、死生学の核心に関わる問題が闡明にめぐり出される機会となった。



嶋内 博愛 (本COE研究拠点形成特任研究員 文化人類学)

去る6月25日(木)夕方、法文一号館113教室にて、「Gordon Planes (Chief) & Shirley Alphonse (Healer) 死生を語る」と題する講演会が開催された。タイトルからして異色のこの催しは、北米先住民・スークの首長ゴルドンプラネス氏とヒーラーでありシャーマンでもあるシャーリー アルフォンス師の来日にあわせて企画されたものだ。平日夕方と思えないほど集まった聴衆のその数はゆうに100を超え、決して狭いとはいえない113教室は熱気で溢れかえった。これは臨床死生学・倫理学研究会の本年第4回の会合も兼ねた催しでもあったため、馴染みの顔も混じってはいたが、多数を引きつけたのは、なにはともあれ、北米先住民が自ら彼らの世界観を語る言葉を聞こうとしたからにちがいない。聴衆の中には精神保健学や心身医学の専門家のほか、文化人類学関係者も散見されたほどである。

スークは、カナダの先住民のひとつで、その指定居留地はバンクーバー島(ブリティッシュ・コロンビア州)最南部付近に位置する。中国地方5県をあわせた程度の広さしかないにもかかわらず、バンクーバー島は、言語を含めじつに多様な文化的要素が混在することで知られ、島の先住民(クワクワカワクウ/クワキウトゥル、ヌーチャーヌヒ/ヌートカ、コースト・セーリッシュの3系統が知られる。うち、スークはコースト・セーリッシュの下位集団)については、これまで、文化人類学者が数多くの著作をものしてきている。たとえば、本年10月30日に満100歳で惜しくも鬼籍に入った大家レヴィ＝ストロースは、『仮面の道』(1975)で、バンクーバー島および海峡を隔てた北米大陸側に居住する先住民が受け継いできた伝承と、それを造形化した仮面の分析を行うことで、彼らの世界観を説明しようとした。しかし今回の講演会の主旨は、他者との差異から出発する文化人類学的なコンテクストにはない。そうではなく、スーク社会と現代日本社会の双方に見出せる共通点を模索することにあった。

会合は、ほぼ定刻通りに始まった。司会の清水哲郎教授の簡単な挨拶に引き続き、まず、スークの人々による儀式が執り行われた。彼らの唄と太鼓によっていわば聖域となった教室内

で、参加者が起立するなか「大地への感謝の祈り」が捧げられたのである。

プラネス氏とアルフォンス師によるレクチャー開始に先立ち、講演会のコンテクストを説明する意味合いで、この会合のオーガナイザーでもある賀陽濟氏(精神科医、田無神社宮司)からの提題「北米先住民(スーク民族)の死生観(あるいは世界観)とその現代的意味」がなされ、そこでは、氏とスークとの出会い、そして彼らの世界観を通して何を学べるかについて提起された。プラネス氏とアルフォンス師によるセッションに入ると、スークがいかに自然を尊び、かけがえのないものと捉えているか、具体例を交えて語られた。その際、駿河台大学の竹中彌生教授とポール マッカーシー教授による的確な通訳の助けは大きかった。ここに記して感謝の意を表したい。

この講演会のキーワードは、何といたっても「アボリジナル」だった。日本ではもっぱら、オーストラリアの先住民・アボリジニを指すものとして用いられるこのラテン語由来の語は、小文字で書けば「土着(の、した人、など)」を意味する。つまり“native”の同義語だ。そして彼らスークは、自らをアボリジナルな者と自認するだけでなく、彼らが生活空間としてきた自然を心から尊重する、その発想をも「アボリジナル」という。つまり彼らのいうアボリジナルとは、いわば、理論よりも直感、説明による理解よりも感覚による納得、自然の克服よりも自然との共生を旨とする思考枠組みといえる。この発想自体は新しいものではない。しかし、理念としてではなく、実践として(納得)し、私たち自身の日々の営みに活かすことができれば、おそらくそれこそが、〈豊かさ〉の新たな指針になるのではないか。それを体感できる講演会であった。講演会の最後、希望者全員にアルフォンス師が施してくれた清めの儀礼の際に配られた記念のしおりは、この講演会での体験を思い起こすインデックスとなるにちがいない。

*表紙の写真は、締めくくりの儀礼のときの太鼓演奏(右がプラネス氏)

清水 哲郎（人文社会系研究科上廣死生学講座教授 哲学・臨床死生学）

本グローバルCOEが行うリカレント教育は、現在「《医療・介護従事者のための死生学》基礎コース」を開設しており、臨床現場でケアに従事する方たちが、死生学一般およびケア実践に関わる臨床死生学を学ぶことを通して、実践に生きる知を涵養することを目指している。参加者は、本基礎コースとして年に何回か開催するセミナーや、各地の医療従事者と連携して随時開催する臨床倫理セミナー、またGCOEの他のイベントのうち本コースが認定するものに参加して、研鑽を積んでいる。本コースとして開催するセミナーは、本年度は12月に臨床死生学会と同時に開催予定の冬季セミナーに力を入れているため、夏季セミナーは、本コースに参加するために必要な最小限の入門的講義を提供することを主眼として企画することとなった。

以上のような次第で、2009年7月25日(土)に、東京大学グローバルCOE夏季セミナー《医療・介護従事者のための死生学》を開催した。これは、いわゆる「初心者向けセミナー」であって、本コースにこれから参加を希望する方のためのものであったため、それほど集まらないのではないかとも思われたが、結局、九州や四国、東北など遠方からの参加者を含み、正規受講生84名、その他聴講生等5名、計89名の参加が得られた。人文社会系研究科の他の行事と重なったことなどから、今回の会場はいつもより狭いところであったため、当日の飛び入りの参加希望者をお断りせざるをえないことにもなった。

死生学コア（島菌担当）、臨床死生学コア（清水担当）は、これまで開催された初心者向

けセミナーと基本的に同内容の講義であった。

加えて、今回の特別講義として、東京大学大学院人文社会系研究科の榊原哲也准教授の協力を得て、「ケアの現象学へ向けて」と題するお話しをしていただいた。ご専門の現象学についての深い理解を、一般市民にも分るように解説され、またそれをケアの現場での理解と実践につなげる可能性を示された講義は、参加者の評判がとてもよかった。看護の領域を中心に、現象学的アプローチが最近注目されているという背景があり、また榊原氏ご自身が、そのような領域に関わって「現象学を用いて「看護」という営みを哲学的に基礎づける試みも始めて」（本研究科ウェブページでの自己紹介より）おられ、看護学研究者との共同研究などもなさっていることもあり、今後も本コースとしては同氏のご協力を期待している。

受講者には、熱心に、かつ積極的に授業に参加していただき、一日4コマではあったが、基礎コースへのよい入門となったと思う。

夏季セミナー授業実績

1. 講義（死生学コア）
島菌 進*「死生学とは何か
—医療現場と人文学の役割」
2. 講義（臨床死生学コア1）
清水哲郎*「ケアにおける死生の理解」
3. 講義（臨床死生学コア2）
清水哲郎「臨床倫理学／スピリチュアルケア」
4. 講義（死生学トピック）
榊原哲也（東京大学 哲学 准教授）
「ケアの現象学に向けて」

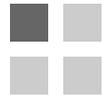
*：事業推進担当者



基礎コースのレポートについて

基礎コース修了の要件を満たしつつある受講者の皆様には、最終的なレポート提出という要件が残っております。そこでレポート作成についてのより詳しい説明が必要なのですが、まだ対応ができていない点を、受講者のみなさまにはお詫び申し上げます。できるだけ早急に、本GCOEのウェブサイトないしメールマガジンでご説明するつもりでおりますので、今しばらくお待ちくださるよう、お願い申し上げます

(清水)



島菌 進 (本COE拠点リーダー 人文社会系研究科教授 宗教学)

立命館大学のグローバルCOE「生存学」創成拠点（立岩真也拠点リーダー）が取り組んでいる課題は、東大の死生学拠点が取り組んでいる課題と重なり合うところが大きい。そこで両拠点の問題意識をつきあわせ、対話しながら相互の課題追求を深めていこうという企てが、2009年9月6日、東大医学部教育研究棟の鉄門記念講堂で行われた。

全体は4部に分かれ、第1部は「現況」と題され、立岩真也氏（立命館大学）と清水哲郎氏（東京大学）の対話が行われた。両者はすでに安楽死の容認いかにについて誌上で討議を行ったことがあり、それを踏まえて、死が間近だと想定される患者に対する「治療の差し控え」の是非について議論が行われた。「当事者の意志によって呼吸器をはずす」というような場面を念頭におきつつ、そこに誰のどのような意志や価値観が作用するのかが問われる。医療費の節減が目指されている状況で、弱者が早い死を選ばされるような事態が進行していないかどうか、そのことを熟知した上での臨床倫理的判断はどうあるべきかが論じられた。

第2部は「死生を学ぶ？」と題され、大谷いづみ氏（立命館大学）と島菌（東大）の対話が行われた。死生学は人々が「死に親しむ」ことを勧めるが、それは生きる意思を萎縮させる効果をもちかねないのではないかと、という問いが主要な論題である。死生学の課題の中には文学作品・芸術作品に現れた死生観の研究といったことも入っている。ホスピス運動は「死を受容する」ことをよしとし、いつしか「良い死」の像を作ろうとすることがある。日本では戦時中



に「死生観」、とりわけ潔い死の美学がさかんにもてはやされたが、これらは死を早めることに加担しようとするきらいがあるのではないかと。他方、生存学は「唯の生」を肯定し、あく

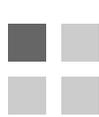


まで生きることの価値にコミットしようとするが、それでは死に向き合う人に対して分かち合う言葉はもたないのだろうか。

第3部は「現場」からの提起」と題され、医療やケアの現場での取り組みや価値判断の実状が語られた。東大の死生学の催しに積極的に関わって来た松戸市立病院救急部の鈴木義彦氏と日本ALS協会（JALSA）理事で立命館大学生存学拠点のメンバーである川口有美子さんの対話である。討議者及び聴衆は、神経難病であるALS（筋萎縮性側索硬化症）患者が治療差し控えに脅かされるような状況を念頭におきつつ、救急医療現場で死が避けがたいとする判断がどのようになされるべきなのかを考えることとなった。

第4部は「哲学・倫理学」からの応答」と題され、福間聡氏（東大）と堀田義太郎氏（立命館大学）が、これまで取り上げられた諸問題を哲学的・倫理的な次元で論ずるための理論的課題について論じた。

続く総合討論では、今回の討議において何が深められたのかを確認しつつ、それぞれの拠点において今後、深められるべき課題が論じられた。現代社会に求められる倫理性のあり方が問われるとともに、生命観、死生観の根幹をどう表現できるのか、表現すべきなのかが問われる。しかし、抽象的な立場表明のような形ではなく、具体的な現場からの問いかけに応じつつ研究や考察を深めていかななくてはならない。フロアからは障害者や意思表示困難な人々の立場を視野に入れて問題理解を深める必要があるとする発言、また、医療現場ではさまざまな立場の人が関わっており医療やケアの専門職は柔軟に対応せざるをえないとする発言などがあり、制限時間ぎりぎりまで緊張感あるやりとりが続けられた。



The 4th International Tokyo Workshop on Applied Ethics and Philosophy 報告および『応用倫理・哲学論集』紹介

一ノ瀬 正樹 (人文社会系研究科教授 哲学)

去る2009年10月21日、東京大学文学部哲学研究室において午後3時30分より、「The 4th International Tokyo Workshop on Applied Ethics and Philosophy」(通称TWAP)を開催し、15名ほどの聴衆が参集し、密度の濃い活発な議論が行われた。この「TWAP」は、従来の「応用倫理・哲学研究会」の英語バージョンである。今回は、オックスフォード大学の「Uehiro Practical Ethics Centre」から、研究員のBarbro Fröding氏が来日されているので、Fröding氏に講演してもらうに際して、第4回の「応用倫理・哲学研究会」を国際会議として開催し、Fröding氏と日本の若手研究者とに英語で研究発表をしてもらう機会にした。双方にとって有意義な機会となることを企図したわけである。

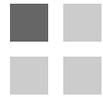
ワークショップは、まず萬屋博喜氏の「The Principle of Double Effect and Moral Intuitions」と題された発表からはじまった。いわゆる「ダブル・エフェクト原理」とは、何か良い結果を生じさせることを意図して行なうとき、それに付随して悪い結果も伴うことが分かっている、その悪い結果を意図するのではなく、単に予見するだけならば、当該行為を遂行することは許容される、とする原理のことである。たとえば、子宮の病気を患う妊娠中の女性に子宮摘出手術を施すことは、確かに胎児の死が予見されるけれども、その女性の命を救うことを意図して行う場合には許容される、とする論法である。萬屋氏は、この原理に対して「道徳的直観」に基づいてなされる批判を検討し、その結果、こうした直観は単にア・ポステリオリなものであって、「ダブル・エフェクト原理」を拒絶する根拠としては弱く、「ダブル・エフェクト原理」は一つの行動指針として残る、と論じた。多くの質問が促され、理解が大いに深まったと思う。

次に、死生学プログラムの研究員である福間聡氏が「Posthumous Harm or Posthumous Wrong?: A Philosophical Examination of Posthumous Events」と題した発表を行った。「Posthumous Harm」の問題とは、死んだ人は果たして「害」を被ることがありうるのか、という問いとして現れる。たとえば、死んだ後の名誉毀損などという事態が果たして理解可能なのか、という問題である。今日、「死の形而上学」という文脈で盛んに論じられている主題である。この問題に対して、福間氏は、たしかに死者が害を被るということはないと認められると

しても、「害される」(harm)とは別個な仕方であり、「悪く扱われる」(wronged)ということには有意味に語りうることを主張した。大変に刺激的な主張であり、質疑は大いに盛り上がった。筆者自身も、「悪く扱われる」のは「誰」なのか、という質問を提起した。現代哲学の先端に関わる問題について、大いに関心が喚起されたと思う。

最後に、Barbro Fröding氏が「In Search of Happy Life: Investigating the Relationship between Virtue Ethics and Human Enhancement」と題した発表を行った。「Virtue Ethics」つまり「徳倫理」とは、行為ではなく、人のあり方に焦点を合わせた倫理学のことで、アリストテレス以来の伝統的分野だが、近代以降、義務論や功利主義といった行為に関わる倫理が主流をなしてきて、背景に退いていたが、今日再び脚光を浴びている主題である。これに対して、「Human Enhancement」とは、知的あるいは身体的な能力を遺伝子操作などによって増強してゆく、という考えのことで、この是非が先端的な応用倫理のポピュラーな話題となっている。Fröding氏は、この二つの思潮は相反すると一般に捉えられているが、実はそうではなく、互いに補完的な関係にあると理解すべきだ、と論じた。筆者自身も発言し、有徳(virtuous)ではなく悪徳(vicious)人々が現に存在する、という事実をどう位置づけるのか、といった質問を提起した。なかなかエキサイティングな討論となり、問題の所在がどこにあるかが浮かび上がってきたと思う。終了後、山上会館にて、オックスフォード大学との今後の交流について話し合い、同時に懇親を深めたのであった。

以上のような「応用倫理・哲学研究会」あるいは「TWAP」は、何回か開催した後、定期的にその成果をまとめて、哲学研究室および死生学プロジェクトの共編冊子として『応用倫理・哲学論集』と題して刊行している。2009年7月に最新刊の第4号が出たばかりである。応用倫理についてのきわめて多様なトピックが論じられており、人文社会系研究科の先端的な研究発表の場となっている。今回の「TWAP」の成果も、後にこの論集の中で発表してゆく計画である。さらなる展開を目指して、少しずつ成果を重ねていきたい。



松本 聡子 (本COE研究拠点形成特任研究員 精神保健学)

そこかしこに血が滴る生首の幻覚が見える、
と言っていた人がいる。

心理検査を行った後の雑談の中で、ある患者さんが自らの幻覚についての話をしてくれたのだ。治療歴が長い方だったということもあり、この方は自らの目に生々しく映っている生首が幻覚であることを認識していた。統合失調症をはじめとする一部の精神疾患では、幻覚や幻聴、妄想などの症状が見られることがある。目の前で見えているもの、聴こえているものは自分自身にとっては確かに存在しているように思えるにもかかわらず他者には見ることも聴くことも叶わない。他者とは共有できない世界というものが存在しているのだ。また、うつ病のためにそれまで楽しめたはずのことも楽しめなくなってしまった人の眼に映る世界もまた、それまで見えていた世界とは異なる姿をしていることだろう。

近年、死生学に対する注目が緩和医療分野を中心とする医学領域においてますます高まりつつある。筋ジストロフィーや筋萎縮性側索硬化症（ALS）のように治療法が分かっていない進行性の疾患も扱う神経内科で医師として勤務をしている父から仕事のことを聞いたことはほとんどないが、時々夜中に病棟から呼び出しの電話があり、容体が急変した患者さんのもとに向かう姿を見てきた。そして、翌日帰宅した父が、その患者さんが亡くなったことを母に語る場面も幾度か見たような気がする。そのような現場で働くということは、自らの死というものについても嫌でも考えさせられることだろう。還暦を迎えた父がカトリックの洗礼をひとり受けたことがそれと関係しているのか否かはわからないけれど。

しかし、私が心理士として勤務している精神神経科では、人の死を目の当たりにする機会はそう多くはない。特に私が勤務する病院では病棟の特性から基本的には3ヶ月以内で退院してゆく患者さんが多いこと、また、開放病棟に適應できる状態の患者さんが主に入院していること、さらに入院中は数多くの職員の見守りもあるため自殺等の事件も発生しにくいこと、心理士が外来で関わるのはほとんど心理検査場面のみであることなどから、直接的に患者さんの

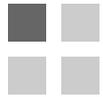
「死」そのものと向き合う機会は少ないのだ。だが、精神科医療が死生学と無縁であるかという、決してそうではない。わかりやすい例としてはグリーフケアを提供する場合や希死念慮がある患者さんに対するケアなどを挙げることができる。しかし、そのように「死」にまつわるケースに関わることがなかったとしても、人が持つさまざまな心の傷や不安、恐怖、喪失、あるいは他者には理解されにくい心の世界などと触れる中で多様な生と日々向き合い、死生学について考えることが可能なのではないだろうか。

人はその生を二重の「世界」の中で送る。物質的・客観的な意味合いでの「世界」と、心の内に存在する内的世界の中で。わたしたちはたとえ同じ空間を共有していても物質的な同一の世界の中にいたとしても、人の主観というフィルターを通して見る「心の世界」は完全に同一なものとなることはない。たとえどれほど心が通い合っている家族や恋人同士であったとしても。たとえば今や一般的な治療法の一つとなった認知療法では、人の眼に映る世界の姿は物事の捉え方、すなわち認知の癖により千差万別であると説く。

今、地球には68億以上の人間の生がある。人の生が紡ぐ物語はどれも死という結末へと収束され、肉体は死とともに大地へと還るけれど、ひとりひとりの心の世界の行く末はさまざまな方向へと拡散してゆく。残された子孫の記憶の中へと。その人が生前生み出した思想、芸術、技術、知恵などに触れた人々の心の中へと。そのようにして、死せるものたちの心の世界の破片は生きている人々の生の中に取り込まれ、受け継がれてゆく。

生はその内に死者と生者の生の欠片を孕みながら寄り集まって「社会」を構成する。生がなくては死も存在しないし、死を内包しない生もまた同様である。精神科医療の現場の中で向き合うさまざまな姿の生は1つ1つがそうしたもののなのではないだろうか。

来年中には特任研究員としての任期終了を迎えるが、今後も心理士としての立場から死生学についてより考えを深めていきたいと思う。



書評 大野和基著 『代理出産——生殖ビジネスと命の尊厳』

柳原 良江 (本COE研究拠点形成特任研究員 生命倫理学・社会学)

日本で代理懐胎の具体例が論じられる時、それは関係する全ての人間を幸福にする、望ましい行為として描かれる傾向が強い。国際ジャーナリスト大野和基氏による『代理出産——生殖ビジネスと命の尊厳』は、こうした状況に一石を投じるものである。

米国で代理懐胎の状況を長年取材した結果をもとに執筆された本書は、日本でも著名な斡旋業者や、姉から代理懐胎を強要された妹、代理懐胎で娘を亡くした母、反対運動を組織する弁護士など、多種多様な人物へのインタビュー内容を織り込みながら構成される。中でも、本書全体で中心的な役割を果たすのが、人工授精型代理出産（トラディショナル・サロガシー）と体外受精型代理出産（IVFサロガシー）の二種類を実施し、計三人の子を得たマーケル家への取材内容だ。

学歴、職業など高い社会的地位を持つマーケル夫婦は、経済的には問題がないものの、不妊に悩む生活を送っていた。そこで斡旋業者に依頼し、社会的地位が低く経済的に十分とはいえない生活にありながらも、人助けをしたいと願う女性に、人工授精を経て子を得る代理懐胎を実施した。無事に一子を得た夫妻は数年後、医療技術の進展から可能となった体外受精型代理出産により、やはり相対的には社会的地位の低い女性を懐胎者として、今度は夫・妻の双方とも遺伝的につながった双子を得る。

マーケル夫婦と懐胎者たちは、代理懐胎の歴史を表す事例であるとともに、依頼者と懐胎者の階層差の問題や、懐胎者の動機、依頼者の葛藤など、代理懐胎特有の問題を提示する典型例でもある。著者はこの事例に対し、あらかじめ彼らの行為を擁護する立場も批判する立場もとらず、依頼者と懐胎者、おのおのの視点による語りから、代理懐胎という困難な営みが実行されるまでを記述する。そこでは、特定の誰かが批判されるわけではなく、代理懐胎に関わるどの立場の人もが、種類こそ違えども、それぞれに苦悩と逡巡を経ている姿が伝えられる。

しかし、本書が既存の代理懐胎に関する書物と異なるのは、代理懐胎が実施されるまでの困難だけではなく、実施後の現状も詳細に描いた点である。著者の取材対象は、依頼者と懐胎者、

斡旋業者にはとどまらない。今までタブー視されていた、産まれた子や、懐胎者の家族たちにも及んでいる。そこで著者が目の当たりにしたのは、女性同士の助け合いの一形態とする美談に収まるものではなく、人体利用やその商品化を巡って様々な葛藤を抱える、人間のリアルな姿である。

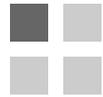
これらの記述の中でも、生まれた子の現状を綴る第四章は注目に値する。代理懐胎最大の当事者ともいえる子供たちに訪れた現実が、安易な家族神話を用いることなく、淡々と記される。そこに立ち現れるのは、代理懐胎を美談の枠からはみ出させてしまう、とりつくしまのないリアリティである。たとえば、成長した子供による、次の印象的な言葉が紹介される。「自分は人と違う。…中略… 双子で5万500ドルもかかったんですから、他の子供たちよりも自分たちのほうが価値があると思ってもいいでしょう？」(142-143頁)

著者はインタビューたちに中立な立場を貫くが、取材が進むにつれて、自らの中に疑問を抱き始める。その疑問は本書の終盤でより明確に意識されるも、突き詰めて説明されることはない。ただ「命の尊厳は確実にすり減り、損なわれていく」という言葉で表現されるのみだ。それは恐らく、他の言葉で説明するにはあまりにも複雑で、しかし著者の中に沈殿した感覚を表す、もっとも端的な言葉なのだろう。けれども、この著者の言葉で結晶化された、代理懐胎に関する居心地の悪さ、不安に満ちた感覚。これこそ、代理懐胎が未だに感情的な議論を巻き起こさざるを得ない理由ではないのだろうか。

代理懐胎の議論が各論に分岐し、混沌化した様相を示している中で、置き去りにされつつある、哲学的な問い。本書は、代理懐胎の現状をえぐりながら、問題の原点を思い返させてくれる一冊でもある。

(集英社新書
2009年5月刊
定価700円+税)





研究機関誌『死生学研究』第12号を発行いたしました。内容の詳細は下記の通りです。

『死生学研究』第12号

・ナミン・リー

現象学と質的研究の方法

・榊原哲也

看護ケア理論における現象学的方法

ナミン・リー「現象学と質的研究の方法」に寄せて

・石瀬博

キリスト教的アルス・モリエンディの一断面

ルターのアルス・モリエンディを起点として

・玉村恭

《忠度》の花

修羅能における生と死Ⅱ

・蝦名翠

上代文学における「王権の中の死」

反乱者の場合

・吉田聡

〈生きている〉こととの了解と自己性

〈生〉の意味に関する現象学的解釈

公開・国際シンポジウム

「礼拝像と奇跡 東西比較の試み」

・秋山聰／富澤かな

はじめに

・秋山聰

礼拝像と奇跡

東西比較の試み

・長岡龍作

仏教における「霊験」

仏が感応する場と表象

・アイヴァン・ギヤスケル

複製技術時代以降のキリスト教の奇跡像を求めて

・加須屋誠

予告された“往生”の絵

清涼寺所蔵「迎接曼荼羅」をめぐる

・ゲアハルト・ヴォルフ

中近世ヨーロッパにおける奇跡像

芸術と信仰のはざままで

■コメント■

大稔 哲也

ムスリム社会の聖遺物

聖遺物とイスラーム

■コメント■

奥 健夫

日本彫刻史の立場から



・福間聡

「死者に鞭打つ」ことは可能か

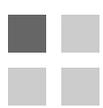
死者に対する危害に関する一考察

欧文レジュメ

研究機関誌『死生学研究』規約

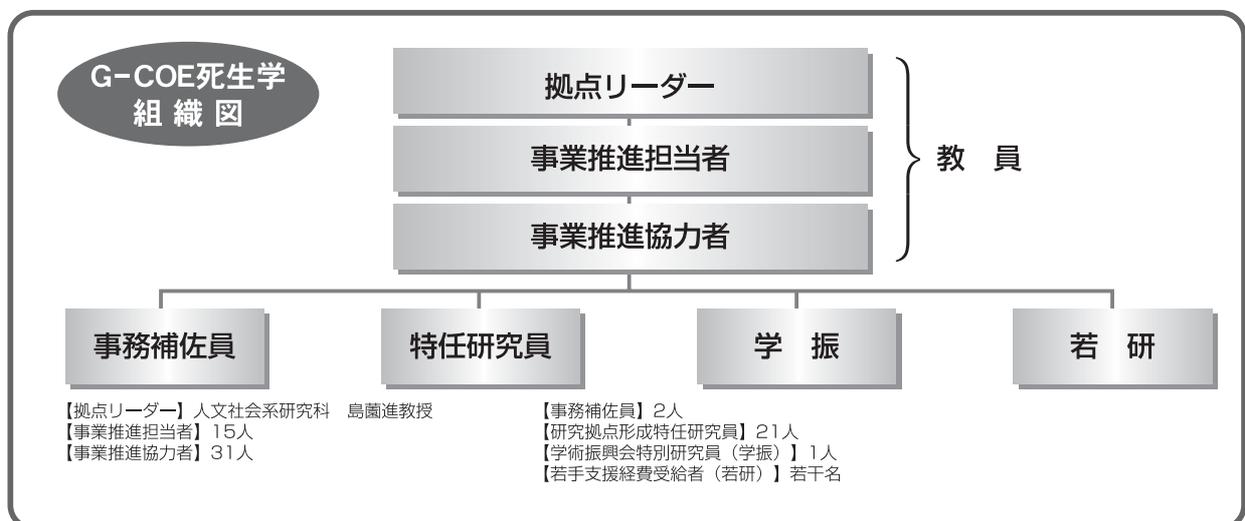
編集後記

(2009年10月31日発行)



事業推進担当者（計15名）

島 園	進（しまその・すすむ）	宗教学宗教史学
秋 山	聰（あきやま・あきら）	美術史学
安 藤	宏（あんどう・ひろし）	日本文学
池 澤	優（いけざわ・まさる）	宗教学宗教史学
一ノ瀬	正 樹（いちのせ・まさき）	哲学
大 稔	哲 也（おおとし・てつや）	東洋史学
上別府	圭 子（かみべつぷ・きよこ）	医学系研究科
熊 野	純 彦（くまの・すみひこ）	倫理学
佐 藤	健 二（さとう・けんじ）	社会学
清 水	哲 郎（しみず・てつろう）	上廣死生学講座教授
下 田	正 弘（しもだ・まさひろ）	インド哲学仏教学仏教学
鈴 木	泉（すすき・いずみ）	哲学
竹 内	整 一（たけうち・せいいち）	倫理学
中 川	恵 一（なかがわ・けいいち）	医学系研究科
山 崎	浩 司（やまさき・ひろし）	上廣死生学講座講師



目次

— CONTENTS —

●巻頭エッセイ●

余生ということ

月本 雅幸 2

コンピュータに死はあるのか

西垣 通 3

●イベント報告●

INTERNATIONAL SYMPOSIUM

DIALOGUE ON DEATH AND LIFE: VIEWS FROM EGYPT

(『死生をめぐる対話—エジプトからの眺望』)

大稔 哲也 4

学術俯瞰講義特別講義「不動の身体を生きる」

島菌 進 7

Gordon Planes (Chief) & Shirley Alphonse (Healer) 死生を語る

嶋内 博愛 8

《医療・介護従事者のための死生学》基礎コース — 2009年度夏季セミナー —

清水 哲郎 9

シンポジウム 死生学と生存学

島菌 進 10

The 4th International Tokyo Workshop on Applied Ethics and Philosophy報告
および『応用倫理・哲学論集』紹介

一ノ瀬正樹 11

●若手の活動●

エッセイ 精神科医療と死生学

松本 聡子 12

書評 『代理出産—生殖ビジネスと命の尊厳』

柳原 良江 13

●書籍紹介●

『死生学研究』

14

●組織図●



死生学 DALs ニュースレター No.24

平成21年12月29日発行

東京大学大学院 人文社会系研究科

グローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」

代表者 島菌 進

〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番1号

Tel&Fax 03-5841-3736

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku/>